

一 次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

旅する者の想像力が発揮されるような旅は、けっしてガイドブックには載っていない。ガイドブックの内容にチュウジツ^aに従っても、そのような旅はできない。

近年、体験者の言葉を中心に、どこでどのように行動し、何をいくらで食べればよいかまで細かく書かれたガイドブック（以下、体験ガイドと呼ぶ）が出版されている。そして、これらの体験ガイドの情報通りの旅をする人が増えている。

実際、インド現地でもそれらのガイドを手にし、ひたすら読みながら、同じ所を同じように旅しようとする旅行者（特に若者）をよく見かける。旅は体験ガイドなしでは絶対にできず、ほんの細かい情報に従わなければ旅行できないとも思っているようだ。

しかしながら、それらの情報は、単なる便利な情報の一つに過ぎない。どの店がおいしいとか、どの店でこの品がいくらだとかは、体験談を書いた「その人の体験」に過ぎない。例えば、料理のおいしさ、宿のカイテキさ^b、「安全性」の程度などは、旅する個人により判断基準が異なる。体験ガイドに書かれているのは、「この問題には、このような解決方法があります」ということに過ぎない。つまり、体験ガイドに書かれた体験談による細かい情報は、自分の旅とは異なる他人の旅の経験でしかない。かれらは体験ガイドに従うことで、旅の面白さを自分から手放していることになる。

こうした簡単なことを忘れ、あるいは理解できず、いつでも誰にでも通用することとゴカイし^c、それらの本を必死になって利用している旅行者を見ると、かわいそうですらある。旅がマニュアル化し、そのマニュアルに従って何のトラブルもなく帰ってこられることが「安心で優れた旅」と考えられている。

現実には厳しい。応用力がないままに体験ガイドの記述を信用して「安心」している人たちは、記述内容と異なる事態に直面したときにはほとんど解決能力がなく、右往左往^aしてしまうだけになる。

こうしたことを考えるとき、私が留学していた北ヒンドゥー教聖地バナーラスで遭遇した事件を思い出す。

あるとき、日本からの若い旅人と、サイクル・リクシャの車夫が言い争っていた。助けてあげようと仲介に入ると、ほんのわずかな金額の乗車運賃の割り増しについて対立しているのだった。車夫の「もう少し割り増しを」という言葉に、若者は強硬に「約束通りの金額」を主張し、「だまされた」と叫んでいた。割り増しを求める車夫は、疲れたときに乗せたのだからと繰り返すだけであつた。これに対して旅行者は、「最初に約束した。それに本にはこの金額と書いてある」と答え、実際にその人の持つ体験ガイドには、運賃何ルピーと記されていた。

しかし、体験ガイドが旅するのではなく、ましてや体験ガイドが汗を流しながらこぎサイクル・リクシャの後ろに乗るのでもない。もしこの旅行者が、「そうか、空腹で疲れていたのだな。約束とは違うが、ご苦労さん」とほんの少しの金額を払っていれば、簡単にことは解決したはずだ。

問題なのは、この旅行者が自分の感覚や乗り合わせた車夫の姿から判断しているのではなく、「約束」とか「体験ガイド」を理由に対抗していることだろう。^②なにも、やたらと無駄な金を支払うことはないが、旅の中でどれだけゆつたりと余裕をもって過ごしているか、想像力を発揮して旅しているかがこうした場面で問われている。幸にして私たちの国の経済発展により、日本からの旅行者は贅沢な旅ができるし、一ルピーが四円弱であることを考えれば、ほんの少しの車夫への割増金など心を大きく持って支払ってあげてもよいのではないだろうか。

体験ガイドは、一つの情報に過ぎず、こうしたときには役に立たない。力になるのは自分の感性と判断だけだということをしっかりと覚えておこう。

私たちはみな、中学や高校の歴史や地理の授業でインドについて学びはしたが、覚えている人は少ないだろう。多くの人がインドについて関心を持ち、あるいは訪れながら、人々の生活や社会についてはなかなか知られていないのが現実である。「インドでは人々の八割がヒンドゥー教徒」という表現だけが一人歩きし、ヒンドゥー教徒が一律にガンジス河で沐浴し、毎日儀礼を行い、寺院に参拝するように理解されている。また、右手で食べるということだけで、「手で食べるきたない人びと」になったり、すべての人が必ず手^③で食べているように感じたりしている。

つまり、少しの情報でインドの社会や文化を知っているだけなのに、もうそれですべてを知ったように決めつけてしまっている。

「インド人はくだ」と決めつけるのは簡単だし、その方が扱いやすい場合もある。しかし、同じインドの人にも「くだ」には当てはまらない人もいるし、もしかしたらコンボンの「くだ」が事実ではないこともあるのだと覚えておこう。

このような「くだ」という決めつけ（これをステレオタイプという）を疑うことから旅をはじめよう。
例えば、インドの人々全員が瞑想して座禅を組んでいるはずもないが、そのように考えている人は、「果たして瞑想しているのか」と観察を続けよう。皆が寺院に毎日参拝するはずもないが、実際に寺院に行き観察してみよう。

私たちは A のインドを「やっぱり」と確認するために行くのではなく、自分の手・足・眼・口でその A を疑い、観察して、新しい姿を見つけないといけない。

旅は個人の楽しみだが、旅する人は、彼の地の文化や人々の姿を正しく日本の人びとに伝えるという仕事も背負っている。インドで嬉しいことや悲しいことが続いても、自分の体験だけにとらわれず、私はこんな経験をしたけど、どこかで楽しかった人もいただろうし、泣いたことのある人もいるはずと、インドやインドの人びとを幅広く理解するように努めたい。

情報をたくさん仕入れ旅に出ることはよいことだが、決めつけてはならない。自分の見たインドは、本当のインドの一部でしかない。だからこそ、自分の眼を大きく開き、オドロキながら、楽しみながら、そしてときには怒りながら旅することにしよう。

（福永正明『インド旅案内』筑摩書房、一九九七年）

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。送り仮名が必要な場合は送り仮名も記せ。

問二 傍線部 ア～エ の漢字の読みをひらがなで答えよ。

問三 傍線部 ①～④ の品詞名を答えよ。

問四 波線部「ガイドを手にし、ひたすら読みながら、同じ所を同じように旅しようとする旅行」と同じ意味の表現を、本文中から一五字以内で抜き出せ。

問五 二重傍線部「私が留学していた北ヒンドゥー教聖地バナラスで遭遇した事件」の内容とその「事件」に対する筆者の考えを、一五〇字程度で要約せよ。

問六 空欄 A に共通して入ることを本文中から七字で抜き出せ。

問七 筆者が考える旅のあり方について、次のことをすべて使用しながら二〇〇字以内で説明せよ。

「本当のインド 他人の旅 応用力 ステレオタイプ 自分の体験」

二 次 の 文 章 を 読 み、 あ と の 問 い に 答 え よ。

図書館はここ三〇年で大きく変化した。暗くて閉鎖的で堅苦しい場所から、市民が誰でも気軽に立ち寄れて資料を借りだすことができる場への転換は、ほぼ成功したといえることができる。ただ、たしかに行政サービスとしての「市民の図書館」の定着はうまくいったようだが、市民が図書館そのものに対して抱いているイメージは実はあまり変化していないのではないだろうか。

公園の一角や城跡にある薄暗い静かな閲覧室で勉強する場というのが、かつて日本人が共通にもっていた図書館像であった。そこは、資料を利用するよりも、自分の知的空間と知的時間を確保するための場であった。たとえ自宅に勉強机があっても自由に使えても、あえて図書館に出かけて勉強を他人と共有する方を選ぶのである。

そして一九七〇年代に新しい図書館のコンセプトがつけられた。これは学習スペースとしての図書館ではなく、資料を借り出して自宅で読む機会を提供する図書館である。以前はいわゆる閉架で直接利用できる資料はかなり限られていた。それに対して、新しいイメージの図書館の中心は開架スペースにおかれた資料であり、利用者は資料を自由に手に取って閲覧できる明るい空間でくつろぎ、好みの資料を家に持ち帰って例えば二週間自分だけで利用することができる。このような「資料提供」が図書館の主たるキノウ

であると考えた図書館関係者は、ここ三〇年で学習スペースのイメージを資料利用のスペースに転換させようと努力を積み重ねてきた。

しかし今でも勉強の場に対する市民からの要求は強い。例えば横浜市では、中央図書館と各区一館の地域図書館のほかに、青少年図書館と呼ばれる社会教育施設が八館、青少年図書館から転換したコミュニティハウスが六館あり、さらに二〇〇校近くの私立学校が毎週二回程度市民図書室と呼ばれる学校開放事業を行っている。青少年図書館もコミュニティハウスも市民図書館も市立図書館とは別個の疑似図書館であり、ここには、少しの図書資料とあとは学習スペースがあれば図書館が成立するという行政サービス提供者の考えがよく現れている。

一九九八年に開館した愛知県豊田市図書館は、トヨタ自動車および関連企業から入る豊かな税収を背景にスペース、蔵書数、資料購入費などの点で全国的にみても突出した潤沢さを誇っている（コラム参照）。大きなビルの三階から六階まで図書館が使用し、書架と閲覧室が贅沢に配置されている。だが、オドロイタのは最上階のワンフロアに机と椅子が二〇〇席分ならんでいたことである。

これは明らかに自習用のスペースである。

A

。これらの自治体に限らず、いわゆるハコもの行政としてヒンされる様々な省庁の補助金による公共施設建設に図書室的なスペースを含めるのは一般的になっている。古くは公民館や児童館などの施設がそうであるし、生涯学習センター、青少年センター、農村センター、福祉センター、男女共同参画センターなど枚挙にいとまがない。集会室と図書館は、こういう施設に必ず備えられるものである。

学習スペースの要求は、明治以来の日本人の典型的な学習態度である「勉強」というスタイルと分ちがたく結びついている。何か調べ物をしようというのではなく、利用者が自分の学習資料を持参した上でそのみを使用するための場が用意されるのは、科挙の伝統をもつ中国や韓国にも見られる。とくに日本では、「刻苦勉励」「立身出世」といった倫理観に支えられた教養主義やエリート主義と強固に結びついて、近代教育システム全体を支配していた。それが戦後、複雑な過程を経て崩壊していったことは、近年研究が進んでいる分野である。

教養主義的な読書は、文学者や思想家と対話することにより自分の世界観をつくりあげる人格形成のエイイである。読書は娯楽でもあったが、このような方法で自分の人格形成を経た後でしか行えないものとされた。それに対して「市民の図書館」の考え方は、その崩壊とヒョウリ一体の関係にある高等教育の大衆化や出版の産業化の亢進^{*}と強固に結びついていた。非日常性の重苦しい読書から脱して、普通の市民の日常から生じる娯楽や生活上のニーズに応える本の提供に徹したといえよう。

コラム

習性となって、どこかに出かけたら地元の図書館を見学することになっている。

もう数年前のことになるが岐阜に用事があったので、ついでにできたばかりの愛知県豊田市図書館に立ち寄ってみた。この図書館は名鉄豊田市駅の前にあつてすこぶる便利がいい。駅前再開発の一環でできた複合ビルの三階から六階までを図書館が占めている。いわば再開発の目玉として設置されたものである。

この図書館の大きさには度肝を抜かれた。床面積は一万二〇〇〇平米あるそうで、これは平均的な県立図書館の面積の二倍くらいに相当する。ただ大きいだけではない。ゆったりと座って資料をナガメルことができるソファ^eや全館で八〇〇席用意されているという机と椅子などの空間配置はよく考えられている。コレクションは目配りがよく効いた選び方がされている。六〇万冊ある資料を検索するためのコンピュータ目録は館内にたくさん配置されている。

何よりもすごいと思ったのは、年間の資料費が他の同規模の図書館の二倍にあたる一億四〇〇〇万円も確保されているというところである。図書館の生命線は資料の充実にある。どれだけ新鮮な資料が補強されるかは予算額で決まってしまう。ここ数年の自治体の財政難でどの図書館も資料費を二割から三割も減らしているから、ほとんど同じ額を毎年つけているこの図書館は脅威である。

むしろこれはグローバルな展開で経営順調の優良企業トヨタ自動車の企業城下町豊田だから可能なことであろう。だからこそであるが、戦後の図書館発展の極北がここに実現されているように思われた。

図書館は今住民が最も支持している公共施設の一つである。その秘密は、ずばり知的雰囲気と私的空間の組み合わせで、きわめて都会的なアメニティが実現していることである。生涯学習が言われて久しいが、子供からお年寄りまで自分のペースで好きな資料をその場で読んだり自宅に借りだしたりすることのできる図書館はその中心にある。

※ 九進・・・ものごとの度合いが激しくなること。

（根本彰『理想の図書館とは何か 知の公共性をめぐって』ミネルヴァ書房、二〇一一年。設問の都合から一部表記をあらためている）

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直せ。送り仮名が必要な場合は送り仮名も記せ。

問二 空欄 A に入る文章として最も適当なものを次の四つのなかから選び、符号で答えよ。

ア 横浜市の例で確認した図書館に対するニーズが、この例からも確認できる。

イ この取り組みは、一九七〇年代になり登場した図書館への要望を適切に反映している。

ウ これは明らかに、三〇年前の図書館像に逆戻りしている。

エ 学習スペースと資料利用の双方に対する市民ニーズを満たそうとした結果なのだろう。

問三 二重傍線部「愛知県豊田市図書館」を別の言い方で表現した箇所を「コラム」のなかから選び、一〇字前後で抜き出せ。

問四 波線部「明治以来の日本人の典型的な学習態度」とはどのようなものか。本文に即して五〇字程度で答えよ。

問五 「コラム」の内容と矛盾しないものを二つ選び、符合で答えよ。

ア 現代の図書館においてなにより重視されるべきは、都会的なアメニティの充実である。

イ 豊田市図書館は書籍をその場で読むことができる点で優れているが、書籍を持ち帰ることができない点に課題がある。

ウ 現在多くの図書館は運営資金が潤沢ではなく、豊田市図書館とは異なり予算が削減される傾向にある。

エ 図書館の運営に企業がかかわる場合があり、それが地域の再開発の目玉となる場合は積極的に誘致を進めるべきである。

オ 豊田市図書館と同程度の規模の図書館の場合、運営予算は七〇〇万円ほどである。

問六 図書館の変化した点と変化していない点を、本文に即して一五〇字程度で説明せよ。